

随時募集

成人講座等助成事業の募集

日常生活に役立つ講座や就業に役立つ資格や技術を取得するため、公共機関が実施する職業訓練講習や技術講習などを受講される方に対して受講費の一部を助成します。

【助成率】 事業費の80%以内（限度額 50,000円）

- * 講習事例 上越人材ハイスクール主催「パソコン入門」
上越人材ハイスクール主催「エクセル応用」
新潟県立テクノスクール主催「パソコン基礎科」



令和2年度新規奨学生募集

奨学金貸与事業

頸城区在住の方で中学校及び高等学校を卒業した優秀な生徒で経済的に困難な学生に対し無利子で学資を貸与します。

- 出願資格**
1. 頸城区に本籍を有する人、または既に1年以上頸城区に住所を有し引き続き居住している人
 2. 高等学校（中等教育学校の高等課程を含む）、高等専門学校、特別支援学校（高等部に限る）、専修学校（高等課程・専門課程で就業年限が2年以上のものに限る）、大学及び大学院（但し修士課程2年に限る）に在学している人

●貸与額

区分	月額	入学金
高等学校（中等教育学校の高等課程を含む）、高等専門学校（1～3年）、専修学校（高等課程）、特別支援学校（高等部）	10,000円	50,000円
高等専門学校（4～5年、専攻科）、短大、専修学校（専門課程）	20,000円	200,000円
大学・大学院（修士課程）	30,000円	300,000円

- 返還方法** 最終学年卒業の1年後から貸与年数の倍の期間で返還していただきます。
年賦、半年賦、月賦のいずれかの方法を選択することができます。

※詳しくは、下記問い合わせ先へお気軽に電話ください。

奨学生からの近況報告

私は大学4年間を県外で過ごし、昔からの夢であった看護師を目指して勉強しました。初めての一人暮らしは、とても不安でした。また、看護師になるには、こんなに大変な学生生活を送らなければならないのかと思いながらも、大学で出会った友人達と支え合いながら多くの学びを得てきました。勉強や実習でなかなかアルバイトをする事が出来ない状況でも奨学金があったおかげでしっかり生活ができていました。

現在は、無事に看護師国家試験に合格し、地元に戻って看護師として働いています。まだ未熟で毎日が勉強であり、うまくいかずに辛いと思う日もありますが、今は昔からの夢のスタート地点に立ったばかりで、これからなんだと自分に言い聞かせ、毎日頑張っています。

大島 汐莉（平成31年3月卒）



問い合わせ・申込み先

(公財)ユートピアくびき振興財団

頸城区百間町636番地 頸城区総合事務所2階
TEL 025-530-2771 FAX 025-530-2820

ユートピアくびき 振興財団会報

第47号
2019.12.15

参加者募集

成人講座開催 受講者募集

認知症予防と介護～認知症の正しい理解とケア～

日 時 令和2年1月31日(金) 午後2時から（質疑応答も含め90分程度）
会 場 希望館 第2会議室
講 師 認知症疾患医療センター 保健師 秦 五津子氏
定 員 30名（電話受付 先着順で定員になり次第締め切り）
講演内容 ・認知症ってどんな病気？ ・見逃さないで！認知症のサイン
・認知症の原因は？ ・認知症と物忘れはココがちがう！
・介護について など

受講は無料ですが、お申し込みが必要です。受講希望の方は、財団事務局（TEL530-2771）までお申し込みください。

事業レポート

地域人材育成事業

文化講演会開催

であい ふれあい ひびきあい～「のど自慢」12年の旅から～
講師 宮川泰夫 氏（元NHKアナウンサー）

10月8日(火)希望館多目的ホールにお馴染みの鐘の音が響きます。「キンコンカーン♪♪♪」のど自慢のテーマ曲が流れると会場は自然と手拍子がおこりました。「皆さんこんにちは。HNKのど自慢、司会の宮川泰夫です。今日は新潟県上越市からお送りいたします。」と、まさに番組そのもの。和やかな雰囲気で講演会が始まりました。

司会を退いた今でも、のど自慢が大好きな宮川さんですが、のど自慢の担当になったときは、とても不満で、嫌々だったと言います。それまで、朝の顔として報道番組を担当し「私を通して世界を伝えている」と自負していたため、「何でニュースキャスターの私がのど自慢の司会なのか」との思いが強かったそうです。

しかし、全国各地で15万人の人々と出会い、その想いを知り地域を知り「この番組はなんとすばらしい番組だ」と思うようになりました。脳梗塞で倒れながら2ヶ月後の予選会に出たため懸命に練習した高齢男性からは「歌は言葉を取り戻す力になる」とこと、中国残留孤児で一時帰国した町の人々にお礼をしたいと、町民に教えてもらった日本語で歌った女性からは「歌はお金や物を超える真心になる」とこと、「歌の力はすごい！」と思わされたエピソードを紹介しました。

最後に、「地域こそが人の暮らしの原点で、心の栄養を育む源である」と締めくくりました。



▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼ 青少年育成講座開催

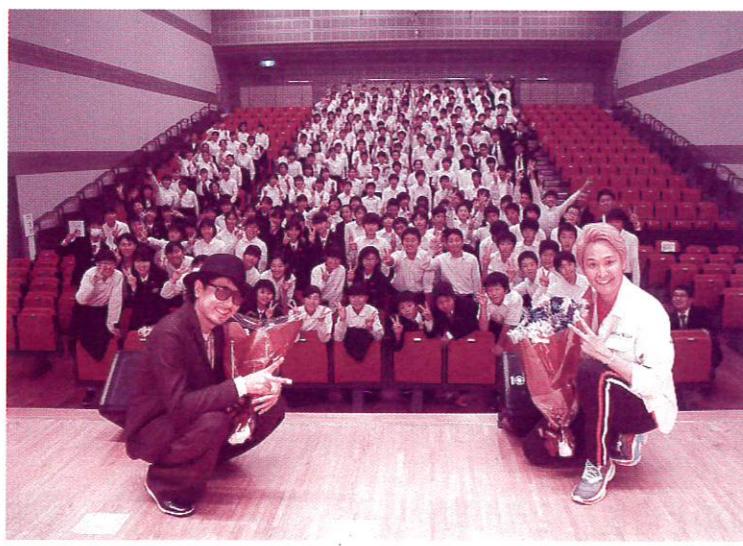
Rafvery（ラフベリー）頸城中学校創立40周年記念公演

10月12日頸城中学校創立40周年記念式典に続き青少年育成講座としてラフベリーの記念公演が開催されました。ラフベリーは、県内を中心に活動する2人組音楽ユニットで、メンバーのKAZZ（古川一人）さんは頸城中学校の卒業生。

公演では、中学校時代の想い出や家族の話を交えながら、結婚式場のCMでお馴染みの「笑顔のままで」やメンバー2人がそれぞれの母親を想って作詞した「かあちゃんアナタへ」など全6曲を披露してくれました。生徒達は（保護者や先生方も）立ち上がり、歌に合わせて手拍子や手振りをして盛り上りました。

KAZZさんは「中学時代の自分は、みんなに誇れるようなことは何もない。ただ音楽が好きで、ずっと音楽をやってきて、それを仕事にすることができて、たくさんの人に支えられて、今がある。」「これから、いろんなことがあると思うけど、自分の目標や夢に向かって頑張ってください。」と生徒達にエールを送りました。

生徒達は、アーティストとして活躍する先輩からメッセージを受け取ることで、自分の将来や地域の未来を展望する貴重な機会となりました。



記念曲「七色模様」を共同制作し初披露

今回、頸城中学校40周年の記念として、ラフベリーと生徒達が共同で曲を制作。公演の最後に、頸城中学校全校生徒の合唱で披露された。

生徒達は6月から制作に取り組み、日々の学校生活の中で感じていることや想い、未来への希望を歌詞にして、ラフベリーに託した。ラフベリーは生徒達から募った歌詞を基に、約2か月半をかけて記念曲「七色模様」を完成させた。

生徒達は9月から合唱の練習を始め、この日が初披露となった。



まちづくり振興支援事業

ふるさと講座開催「軽便鉄道郷愁の軌跡を巡る」

軽便鉄道郷愁を巡る旅に参加して 白滝 武

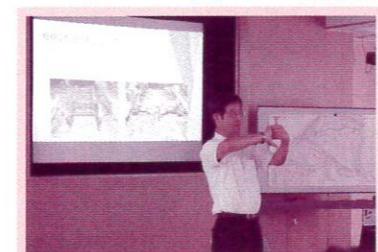
小学生の頃、夏休みによく一人で軽便に乗って母の実家である頸城村五十嵐に遊びに行っていました。

古城（現在の港町）からバスに乗って新黒井駅へ（これまではてっきり黒井駅だと思っていました）。そこから軽便鉄道に乗り換えて田んぼの真ん中を通り、北四ツ屋をすぎ百間町で降りました。初孫ということで大変可愛がられたこともあるのですが、軽便の窓から母の実家が見えると心がワクワクしたものです。

今回、百間町に保存されているレールパークで軽便に乗り走る体験もさせていただき、まるでおとぎの国にいるようでした。小学生の頃はけっこう大きな乗り物だと思っていたのですが、こんなに小さく可愛かったのかという驚きと、貧しくても幸福に満ちた日々や、優しかった祖父母や父、母の面影が走馬燈のように蘇つてきました。

古希を迎える妻と二人で参加したなつかしい軽便鉄道の旅、企画していただいたユートピアくびき振興財団、くびきのお宝のこす会の皆様には心から感謝しております。

それにもしても坂口記念館で心地よい秋風を感じながら食べた九品の食彩、おぼろ汁、冷やした甘酒、おいしかったですね。本当に幸福な小さな旅でした。



軽便鉄道の歴史を学習



黒井駅南口にある新黒井駅石碑



レールパークで乗車体験



線路跡を歩く（鶴ノ木地内）



山本みゆき



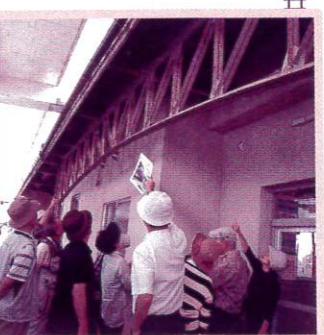
今も残るガーター橋（石神地内）

ふるさと講座に参加して

10月1日晴天の中、軽便鉄道の軌跡を巡る講座に参加してきました。そもそも何故軽便について学ぶに至ったかというと、2年前にコッペルを題材にした紙芝居に原画を描いた経緯があるからでした。その時にも資料を集め、ある程度理解したうえで制作したはずでしたが、時系列に沿って教えていただけた内容は大変興味深いものでした。

まず、軽便鉄道開通までの座学。人の移動や物資輸送の手段がない時代、東頸城の産業発展に鉄道は必要不可欠と精力的に行動した先人達。そこには私利私欲の微塵も無く、ただ地域発展の礎にならんとする高い志がありました。また、重機など無い時代に僅か半年で線路の敷設工事を完了するなど、いかに必要とし心待ちにしていたのか、便利な生活に慣れきってしまった現代人の私は感心するばかりでした。

次に現地探索。古い写真と照らし合わせながら新黒井駅から浦川原駅跡までバスで遡りました。かつての線路跡は幅も狭く田んぼのあぜ道とあまり変わらない規模でしたが、整地する為にどれ程の汗が流されたか思いを馳せるとやはり語り継ぎ守っていかなければならない地域のお宝です。頸城は外部からの移住者も多く認知度が低いコッペル。いつの日かまた煙を吐いて自走する姿を見る日が来ることを願います。



当時の浦川原駅舎を利用した東頸バス社屋